

中世都市鎌倉における 古瀬戸と輸入陶磁 中世前期の補完関係について

Koseto Ware and Imported Ceramics in the Medieval City of Kamakura:
Complementary Relations in the First Half of the Medieval Period

藤澤良祐

はじめに

① 鎌倉遺跡群における搬入状況

② 古瀬戸と輸入陶磁の補完関係

おわりに

【論文要旨】

宋・元代の中国産を主体とする輸入陶磁と、中世唯一の国産施釉陶器である古瀬戸が、モデルとコピーの関係にあったことは良く知られているところで、古瀬戸は輸入陶磁の補完的役割を担ったにすぎないとされるが、実態は果たしてそうだったのであろうか。中世前半期の最大の消費遺跡である鎌倉遺跡群において、古瀬戸と輸入陶磁の補完関係を検討したのが本稿である。

これまで鎌倉では数多くの発掘調査が行われているが、比較的良好な遺構面が検出され陶磁器の種類・量が多い四つの遺跡を取り上げ、古瀬戸と輸入陶磁の出土量（廃棄量）を分析したところ、輸入陶磁は13世紀末から14世紀初にかけて廃棄量がピークとなるのに対し、古瀬戸の廃棄量のピークは一時期遅れ鎌倉幕府の崩壊する14世紀前葉にあり、その背景として当該期における輸入陶磁の流通量の減少が予想された。また、モデルとコピーの関係にある各器種においても、輸入陶磁の方が廃棄（出現）時期が早いという傾向が認められ、さらに四耳壺・瓶子・水注などのいわゆる威信財では、古瀬戸製品であっても生産年代と廃棄年代との間に半世紀近い伝世期間が想定された。

一方、鎌倉で大量に出土する青磁や白磁の碗・皿類は、当該期の古瀬戸はほとんどコピーしないのに対し、入子・卸皿・柄付片口などの古瀬戸製品は、鎌倉での出土比率が高いにも拘らず輸入陶磁に本歌が確認できないことから、古瀬戸と輸入陶磁の間には一種の“住み分け”が行われていたことも明らかである。すなわち中世前半期の古瀬戸は、輸入陶磁に存在しないもの、あるいは輸入陶磁の流通量の少ないものを重点的に生産しており、両者は戦国期の白磁や染付の皿と瀬戸・美濃大窯製品の皿類にみられるような競合関係ではなく、コピーである古瀬戸製品自体が、モデルである輸入陶磁に匹敵する価値観を有していたと考えられる。

はじめに

古瀬戸とは、他の国内の中世窯業地が壺・甕・鉢や碗・皿類など無釉の日常容器生産を主体とするなか、唯一尾張瀬戸窯において中世全般を通じて生産された施釉陶器の総称であり、陶祖藤四郎（加藤四郎左衛門景正）による開窯伝承を挙げるまでもなく、南宋代の中国陶磁の強い影響を受けて成立したことは良く知られている。

中国産を主体とする輸入陶磁器と古瀬戸製品のモデルとコピーの関係については、これまでに数多くの論考が発表されており、モデルとコピー論⁽¹⁾については議論が出尽くした感がある。その議論の中で、古瀬戸は中国陶磁の補完的役割りを果たしたにすぎないとさえいわれているが、それは具体的にはどのような補完関係であったのであろうか。戦国期の城館出土の焼物には、中国陶磁と瀬戸・美濃大窯製品の茶・花・香道具のように、量的な不足分を安価なもので補うという価値的補完関係と、陶磁器の皿とかわらけのように、時と場により道具が使い分けられる機能的補完関係が存在し、価値的補完関係では、中国陶磁と瀬戸・美濃が競合しその多寡は階層差を示すと考えられているが、中世にも同様な補完関係が存在したのであろうか。本稿では旧来のモデルとコピー論から少し視点をかえ、中世前半期最大の消費遺跡、鎌倉遺跡群における古瀬戸と輸入陶磁の補完関係について検討を加えたい。

①……………鎌倉遺跡群における搬入状況

鎌倉では、これまでのところ200近い遺跡（地点）の発掘調査が実施され、そのほとんどすべての地点で古瀬戸と輸入陶磁の出土が報告されている。とりわけ古瀬戸製品は、前期様式から中期様式のものが出土しており、このような遺跡は全国的にも例がなく、中世前半期の補完関係をみるには最も重要な遺跡群といえよう。また、鎌倉では地域や性格の異なる様々な遺跡が調査されており、本来ならば遺跡群全体について検討すべきであるが、鎌倉の場合、中世における地形の削平や造成が著しいために、一括遺物の摘出が難しく良好な層位的出土例が乏しいという事情があるため、比較的良好な遺構面が検出され、しかも陶磁器の種類・量が多い4遺跡を取り上げ検討してみたい。⁽⁴⁾⁽⁵⁾まず、各遺跡の遺構面の概要と古瀬戸・輸入陶磁の全般的な出土傾向をまとめておく。

(1) 千葉地遺跡⁽⁶⁾

千葉地遺跡では5枚の遺構面が確認されている。最下層の第5面では道路および道路側溝が作られ、複数の掘立柱建物・方形堅穴建築址・溝・土坑などが認められる。第4面では道路と道路側溝の他に掘立柱建物・溝・木樋状遺構があり、地境溝が出現する。第3面では道路および側溝、数回にわたり改修された地境溝が継続し、道路側溝木組溝・掘立柱建物・井戸状遺構・板敷遺構・木組の土坑などが確認されている。第2面には道路や地境溝が存続し、木組溝・側溝・井戸・板敷遺構・方形堅穴建築址などの他、新たに基壇状遺構が登場する。第1面には前代のような建物群はな

く、ほとんど形態を留めていない道路と既に廃絶したと思われる基壇状遺構、その周辺部に柱穴がみられるにすぎず、遺跡周辺は衰退したと考えられている。

千葉地遺跡では発掘調査報告書の掲載遺物のデータを提示した。したがって、出土量の実態は古瀬戸・輸入陶磁ともこれを遙かに上回ろう。また、古瀬戸の入子・卸皿については出土遺構面が明記されていないため、やや不十分なデータである。最下層の第5面では図化された古瀬戸はなく、輸入陶磁も僅かな出土にすぎない。第4面になると輸入陶磁は急増するが、古瀬戸は非常に少ない。第3面では輸入陶磁の出土量はさらに増加しピークに達するとともに、古瀬戸も急増し中期様式の製品が出現する。第2面では輸入陶磁は減少傾向に転じるのに対して古瀬戸の出土量はピークで、中期の器種が出揃い前期のものを圧倒するようになる。第1面では両者とも激減し、遺跡周辺が衰退したという遺構の状況とも一致する。

(2) 千葉地東遺跡⁽⁷⁾

千葉地東遺跡では9枚の遺構面が確認され、8期にわたる出土遺物・遺構の変遷が想定されている。第Ⅰ期・第Ⅱ期は遺物の包含層で遺構は存在しない。第Ⅲ期（第9・8面）では、第9面に比較的規模の大きい素掘りの溝、第8面に若干の溝や土坑が検出されるにすぎず、建物・井戸などの施設は存在しない。第Ⅳ期（第7・6面）では、第7面も前代とほぼ同様な状況であるが、第6面になると調査区全体に遺構が分布し、河川南岸に木組護岸が構築され方形竪穴建築址・井戸などが出現する。第Ⅴ期（第5面）では河川北岸に道路状遺構と方形の区画が形成され、基壇状遺構・方形竪穴建築址・井戸などが集中する。第Ⅵ期（第4面）では木組護岸・道路状遺構・方形の区画が継続し、方形竪穴建築址や井戸などが存在する。第Ⅶ期（第3面）でも木組護岸・道路状遺構・方形の区画が維持され、方形竪穴建築址・井戸などの他に四方に雨落ち溝をもつ掘立柱建物や基壇状遺構が確認されている。しかし第Ⅷ期（第2・1面）になると、第3面まで継続した河川南岸の木組護岸と北岸の道路状遺構が消失し、第2面には方形竪穴建築址が存在する程度で、第1面は遺構の保存状態が悪く、小規模な建物と土坑が若干分布するのみである。

千葉地東遺跡では、報告書掲載遺物の中から遺構面との対応がある程度可能なもののデータを提示した。したがって、北東側河川砂層の出土遺物を加えた第Ⅱ期・第Ⅲ期・第Ⅵ期・第Ⅷ期では、他の遺構面より出土量が多くなっている。第Ⅱ期・第Ⅲ期に輸入陶磁は既に一定量出土するが、古瀬戸は未だみられない。第Ⅳ期以降、輸入陶磁の出土量は急増するようで、おそらく第Ⅴ期あたりがそのピークとなり、第Ⅵ期にはやや減少に転じるものと思われる。一方、第Ⅳ期から第Ⅵ期の古瀬戸の出土量は、輸入陶磁の半分以下であり確実に中期以降とされるものは含まれていない。第Ⅶ期には大量の河川からの出土遺物が含まれ、特に輸入陶磁に前代の遺物を含む可能性が高いが、古瀬戸が輸入陶磁を上回るようになり、中期様式の製品が他を圧倒し豊富な器種が出揃う。第Ⅷ期には古瀬戸・輸入陶磁ともに激減し、古瀬戸製品には後期様式のものが含まれる。

(3) 今小路西遺跡⁽⁹⁾

今小路西遺跡では少なくとも6枚の中世遺構面が確認されている。中世第6面で区画と排水を兼ねた溝が掘られ土地利用が開始される。しかし、中世第5面では全く別の地割りが形成され、南谷

には武家屋敷とおぼしき堀で区画され多くの掘立柱建物を有する屋敷が成立し、その周辺には街路沿いまで庶民クラスの家などが建ち並ぶ。第5面で成立した地割りはその後も踏襲され、中世第4・3面では一層整備されたものになり、北谷と南谷に二つの武家屋敷地が存在し、南谷屋敷の周囲には庶民居住区が道に接して存在する。武家屋敷は堀か築地で囲まれ、門を構え内部には広い庭と母屋、多くの付属舎が整然と配される。特に北谷屋敷では礎石建物が多く、政権の枢要部にある人物の邸ないし別邸であった可能性が指摘されている。中世第2面では北谷屋敷は土塁と大溝を有するものの、比較的小規模な掘立柱建物を主体とし、南谷屋敷でも複数の掘立柱建物や井戸・柵などが確認されている。中世第1面でも旧来の地割りが存続するが、市街地の最終末の様相を呈しており遺構は取り立ててみるべきものはないとされる。それでも南谷屋敷地では礎石建物がみられ、その外周部の庶民居住区には方形竪穴建築址や井戸が存続する。

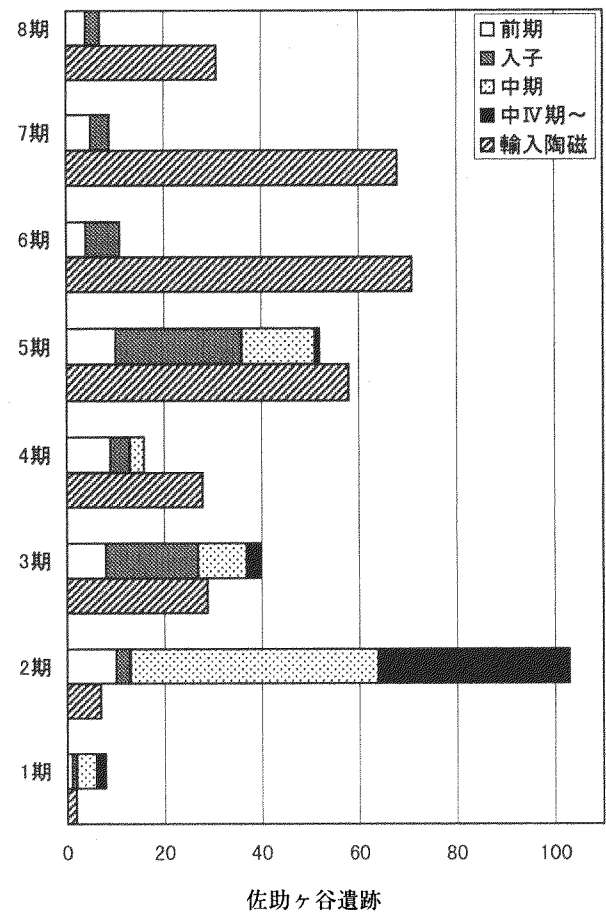
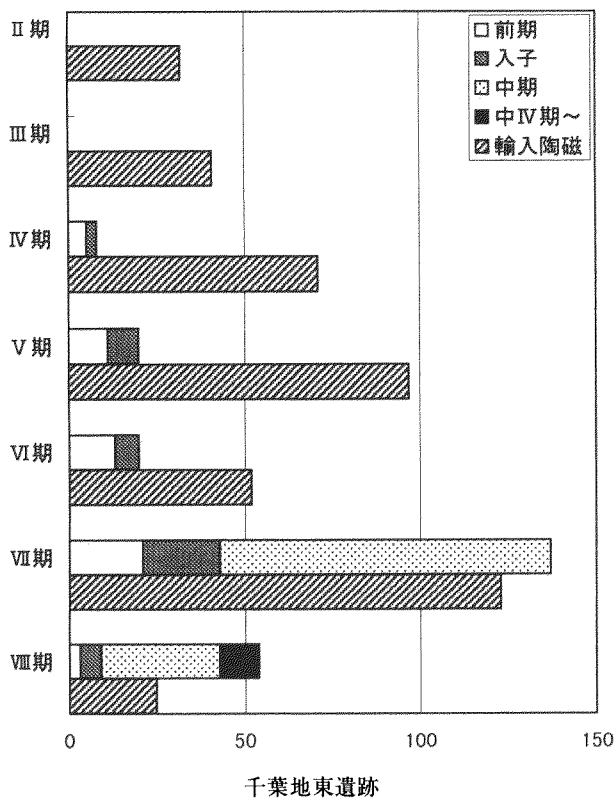
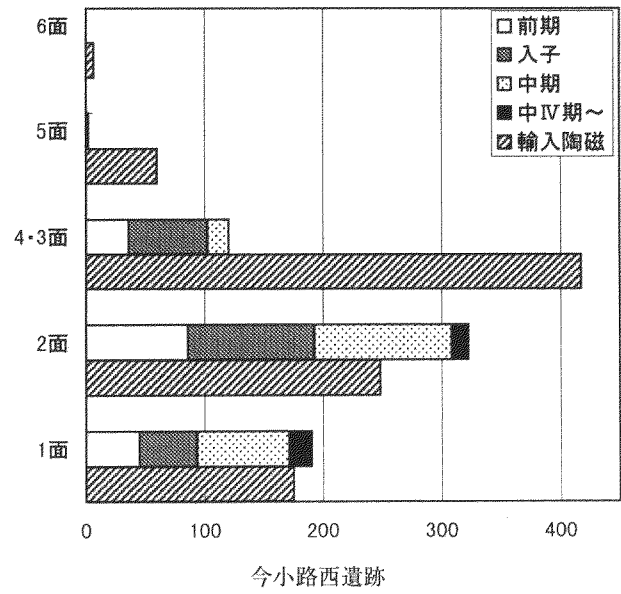
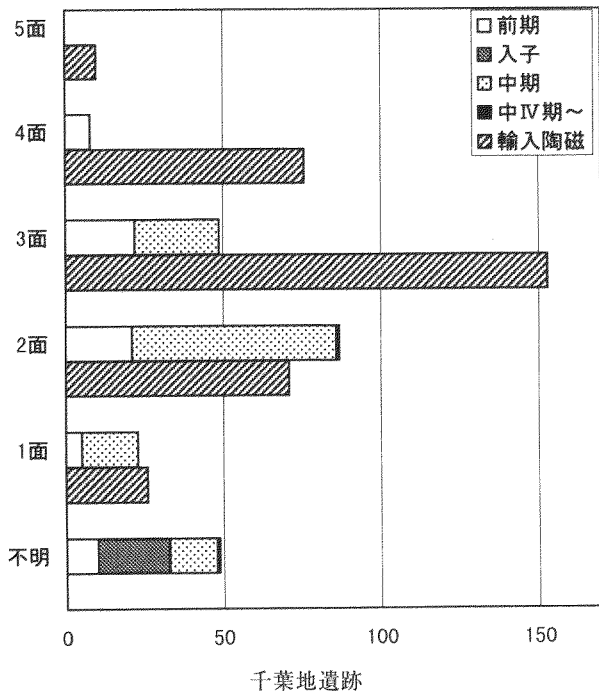
今小路西遺跡では、古瀬戸は北谷・南谷の両屋敷地の遺構面が特定できる全出土遺物の接合後の破片数⁽¹⁰⁾、輸入陶磁は報告書掲載のものをデータ化した。したがって、実際の輸入陶磁の出土量はこれを遙かに上回る。第6面には古瀬戸はなく輸入陶磁も僅かにみられるにすぎないが、第5面で輸入陶磁は急増し、第4・3面でピークに達する。古瀬戸の出土量も第4・3面で急増し、中期のものも一定量含まれるようになる。続く第2面では輸入陶磁は減少傾向を示すのに対し、古瀬戸のピークはこの時期にあり、中期様式の製品を中心に豊富な器種が出揃う。第1面では古瀬戸・輸入陶磁とも減少するが、それでも両者とも100点以上確認されており、他の3遺跡を圧倒することは注目されよう。

(4) 佐助ヶ谷遺跡⁽¹¹⁾

佐助ヶ谷遺跡では9期にわたる遺構群が確認され、5時期におよぶ変遷が想定されている。変遷Ⅰ期（第9期）は本遺跡の成立期で、遺構は非常に少なく自然地形に手を加えず利用している。変遷Ⅱ期（第8～6期）になると佐助川沿いに道路が作られ、それに沿って溝による方形の区画が出現する。第8期には区画内に庭と井戸を有する板壁掘立柱建物があり、第7・6期には道路に沿って複数の板壁掘立柱建物が建ち並び、板塀や石垣なども認められる。変遷Ⅲ期（第5～3期）では佐助川沿いの道路が消失するが、2個の礎石を使用した門、倉をもつ建物、瓦を伴う基壇、木組の池などが出現し、礎石建物が増加する。なお、第5期から第3期の建物は、ほぼ同位置に類似した構造・規模を有し、使用方法や性格に変化がなかったと考えられている。しかし、変遷Ⅳ期（第2期）には前代のような建物群はなく、2条の溝と井戸・土坑がみられるにすぎず、変遷Ⅴ期（第1期）ではさらに遺構が減少し、溝の存在と堆積土から水田化したと考えられている。

佐助ヶ谷遺跡では、古瀬戸は遺構面に伴う全出土遺物の接合後破片数⁽¹²⁾、輸入陶磁は報告書掲載遺物のデータを提示した。したがって、他の遺跡と同様輸入陶磁の方は実態を表していない。既に第8期から古瀬戸・輸入陶磁とも出土しているが、出土量は第6期までは後者が前者を圧倒し、輸入陶磁のピークはこのあたりにある。古瀬戸が増加するのは第5期からで、第4期以降は輸入陶磁は減少し、第3期には古瀬戸が輸入陶磁の比率を上回るようになる。第2期には古瀬戸が急増するが後期のものが確実に一定量含まれており、輸入陶磁はほとんどみられなくなる。第1期は両者とも極めて少なくなり、水田化したという発掘調査の所見とも一致する。

表1 鎌倉遺跡群における古瀬戸・輸入陶磁の搬入状況



(5) 各遺構面の推定年代

以上のように、今回検討の対象とした上記の4遺跡では下層の遺構面に輸入陶磁が多く、上層の遺構面には古瀬戸が多いという傾向が共通して認められ、古瀬戸と輸入陶磁には出土量全体のピークにずれがあることが明らかになった。輸入陶磁の出土量がピークとなるのは千葉地遺跡では第3面、千葉地東遺跡では第Ⅴ期、今小路西遺跡では第4・3面、佐助ヶ谷遺跡では第7・6期あたりで、この時期には出土量ばかりでなく極めて豊富な器種が出揃い、表現の差こそあれ中世鎌倉の都市整備の一環と考えられる区画・地境の区割り・地割り等の形成される時期と一致することが指摘されている⁽¹³⁾。

しかし、その年代観については千葉地遺跡は14世紀前半、千葉地東遺跡は13世紀第4四半期、今小路西遺跡は13世紀末から14世紀前葉、佐助ヶ谷遺跡は13世紀第4四半期から14世紀初めとされ各遺跡によって若干の相違が存在する。さらに、その直後の遺構面にみられる輸入陶磁が減少し、古瀬戸の出土量がピークとなり中期様式の豊富な器種が出揃う時期についても同様の相違が認められる。筆者は、これら4遺跡の立地や性格からみて、輸入陶磁と古瀬戸それぞれの出土量がピークを迎える時期は、ある程度一致するものと考えている。ところで中世鎌倉における古瀬戸製品は、全体的な傾向として出土遺跡数・出土量とも後期様式の段階に減少するが、もしそれが中世⁽¹⁴⁾都市鎌倉における最大の画期、すなわち元弘3年(1333)の鎌倉幕府の崩壊に対応するとすれば、古瀬戸の編年では中Ⅲ期と中Ⅳ期との境に大きな画期が認められるはずである。そこで、表1には確実に中Ⅳ期以降に編年される古瀬戸製品の出土量を遺構面毎に挙げておいた。

まず千葉地遺跡では、報告書に掲載された古瀬戸の総数は216点で、中Ⅳ期以降に編年されるものは僅か2点にすぎず、鎌倉幕府崩壊後に居住域であったとは考えにくい。第2面までは地境の区割りや建物群が維持されており、第2面までを鎌倉時代と考えるべきであろう。また千葉地東遺跡では、239点中11点が中Ⅳ期以降に位置付けられる。いずれも第Ⅷ期に相当する第2面以上の出土であり、第Ⅶ期(第3面)までは中Ⅲ期までに収まる。したがって、方形の区画が維持され建物群の存続する第Ⅶ期までを14世紀前葉とみることが許されよう。さらに今小路西遺跡では、北谷・南谷両屋敷地の古瀬戸の総数は637点で、確実に中Ⅳ期以降に位置付けられるものは、第2面に14点、第1面に19点、計33点確認されており、鎌倉幕府崩壊後も居住域であった可能性を残している。しかし、これをもって第2面以降を14世紀中葉以降に位置付けるのは少し抵抗がある。第2面出土の14点の内訳は盤類が8点と最も多く、小皿類が2点、平碗・香炉・卸皿・柄付片口は各1点にすぎず、第2面にみられる建物群で使用されたとするにはあまりにも貧弱な内

表2 各遺構面の相対的推定年代

千葉地	千葉地東	今小路西	佐助ヶ谷	推定年代
	Ⅱ・Ⅲ期	6面		～13世紀前葉
5面	Ⅳ期	5面	8期	13世紀中葉
4面	Ⅴ期	4・3面	7・6期	13世紀後葉
3面	Ⅵ期		5・4期	13世紀末～14世紀初
2面	Ⅶ期	2面	3期	14世紀前葉
1面	Ⅷ期	1面	2・1期	14世紀中葉～

容といえる。少なくとも第2面の遺構の時期は中Ⅲ期まで、すなわち鎌倉時代の範疇に含めるべきであろう。⁽¹⁵⁾一方、佐助ヶ谷遺跡では246点中45点が中Ⅳ期以降のもので、他の3遺跡とは異なり高い比率を占めており、鎌倉幕府崩壊後も当地が居住域であった可能性を示唆している。当該期の古瀬戸が第2期以降に集中してみられることから、第3期までが鎌倉時代と考えられる。

したがって、これまでは唐物に満ち溢れていた時期を鎌倉幕府崩壊期までとし、古瀬戸製品が主体となる時期をそれ以降の鎌倉府の時代と漠然と考えられてきたが、古瀬戸の編年観からみると、各遺構面の年代を少し古く考えた方が良いと思われる(表2)。そして、この年代を採用すると、輸入陶磁の廃棄のピークは鎌倉幕府の崩壊期ではなく13世紀末から14世紀初めあたりに置くのが妥当で、これは至治3年(1323)頃とされる韓国新安沖の沈没船で引き揚げられた大量の龍泉系青磁のⅣ類が、鎌倉に限らず全国的にまとまって出土することは極めて少ないという指摘と一致するものである。⁽¹⁶⁾

②……………古瀬戸と輸入陶磁の補完関係

さて、鎌倉の上記4遺跡では、14世紀前葉に出土量の上で古瀬戸が輸入陶磁を補完したことが判明したが、ここでは主要器種のモデルとコピーの関係を確認しつつ、両者の出現時期と出土量(廃棄量)がピークとなる時期を比較することにより補完関係の実態を少し詳しくみていきたい。

(1) 四耳壺類

古瀬戸の灰釉四耳壺が白磁四耳壺をモデルに製作されたことは良く知られている。白磁四耳壺の日本への搬入時期は少なくとも12世紀初頭までは遡り、文治5年(1189)に廃絶する平泉遺跡群では大量に消費されている。⁽¹⁷⁾灰釉四耳壺の生産は、古瀬戸様式の成立期である前Ⅰa期(12世紀末)には既に確立しており、それ以前にも無釉の四耳壺が生産された段階が存在するため、瀬戸窯における四耳壺生産は12世紀中葉まで遡る。他の施釉陶器と関係からみると前Ⅱ期(13世紀前半)にかけて量産され、瀬戸のオリジナルと思われる三耳壺や平底四耳壺、小型の四耳壺・三耳壺もこの段階に登場する。

報告書掲載資料と全出土資料を単純に比較することはできないが、各遺跡とも灰釉四耳壺の方が量的優位を占めており、白磁四耳壺の出土数はあまり多いとはいえず流通量そのものが少なかった可能性が高い。白磁四耳壺は千葉地・佐助ヶ谷遺跡では古瀬戸四耳壺より上層の遺構面から、千葉地東・今小路西遺跡では下層の遺構面から出土し、千葉地東遺跡では13世紀前葉には出現している。一方、古瀬戸製品は前Ⅰb期(13世紀初)と前Ⅱ期のものを主体とするにも拘らず、これまでのところ13世紀前葉とされる遺構面からは出土していない。また、古瀬戸製品の廃棄のピークは13世紀末以降で、半世紀近い伝世期間を想定する必要があるだろう。

(2) 瓶子類

古瀬戸の瓶子類は、締腰形の瓶子Ⅰ類と直線胴形の瓶子Ⅱ類に大別され、前者は青白磁梅瓶および高麗青磁梅瓶、後者は青白磁梅瓶のコピーと考えられる。⁽¹⁹⁾青白磁梅瓶は僅かではあるが既に

平泉で出土しており、日本での流通時期は遅くとも12世紀末まで遡る。高麗青磁の梅瓶も12世紀代には流通していたと考えられている。古瀬戸製品の生産開始は四耳壺よりやや遅れ前Ib期で、生産が本格化するのは前Ⅲ期(13世紀第3四半期)以降である。鎌倉では各遺跡とも輸入陶磁の方が量的に優位を占めるようであるが、両者とも13世紀前葉とされる遺構面からは出土していない。また、出現時期は輸入陶磁の方が古く一般的には13世紀中葉で、13世紀末以降に廃棄のピークが認められる。古瀬戸製品は前Ⅲ期以降のものを主体とし、出現時期は今小路西遺跡を除くと13世紀末以降、廃棄のピークは14世紀前葉以降となり、やはり一定の伝世期間を想定する必要がある。

(3) 水注類

古瀬戸の水注には、長頸の水注Ⅰ類と短頸の水注Ⅱ類などがあり、前者は白磁水注、後者は青白磁水注との関係が指摘されている。⁽²⁰⁾ 白磁水注は白磁四耳壺、青白磁水注は青白磁梅瓶と同様の流通年代が想定されるが、古瀬戸製品は前Ib期には生産が開始され、水注Ⅰ類は前Ⅱ期に生産の一つのピークがある。今回取り上げた4遺跡では、四耳壺類や瓶子類と比べ古瀬戸・輸入陶磁とも出土量は少ないが、青白磁水注は13世紀中葉、古瀬戸水注・白磁水注は13世紀後葉には出現し始める。

(4) 洗

黄釉や緑釉の盤と古瀬戸の洗とのモデルとコピーの関係についても以前から指摘されている。⁽²¹⁾ 前者はやはり平泉で出土しており、古瀬戸製品は、前Ia期から前Ib期かけて量産されるものの、前Ⅲ期にはほとんど生産されず中期に別形態のものが復活する。各遺跡での出土量は、輸入陶磁の方が量的に優位を占めたようで、出現時期は一般的に輸入陶磁が古く、千葉地東遺跡では13世紀前葉まで遡り、廃棄のピークは13世紀末以降である。一方、古瀬戸製品は前Ib期のものが主体であるが、13世紀後葉以降に廃棄されている。

(5) 折縁鉢・盤類

古瀬戸の底卸目皿や折縁深皿は、龍泉窯系青磁の蓮弁文や双魚文、無文の鉢・盤類を模倣したと考えられている。⁽²²⁾ 古瀬戸製品は前記の洗と入れ替わるように前Ⅲ期以降に生産が開始され、中期から後期にかけて量産される。上記の4遺跡では、両者ともかなり高い出現率を示し量的にもほぼ拮抗するものの、出現時期や廃棄のピーク時期には差が認められる。すなわち青磁の鉢・盤類は、13世紀中葉には出現し廃棄のピークは13世紀末から14世紀初めであるのに対し、古瀬戸製品は13世紀後葉から出現し始め廃棄のピークは14世紀前葉以降で、生産年代と廃棄年代の時期差はほとんど認められない。

(6) 碗・皿類

表3からも明らかのように、輸入陶磁の中で圧倒的な出土量を誇る青磁や白磁の碗・皿類は、鎌倉では13世紀前葉までは龍泉窯系青磁劃花文碗と同安窯系青磁櫛描文皿、13世紀中葉以降は龍泉

窯系青磁蓮弁文碗と白磁口禿皿とがセットとなり大量に消費されている。一方、古瀬戸製品は前期には施釉碗や平底末広碗が生産されるが、生産量・出土量とも少なく、施釉された小皿類に至っては皆無である。しかし、中Ⅰ期（13世紀末）になると平碗や折縁小皿・丸皿などの生産が開始され、後期にかけて徐々に量産される。鎌倉では輸入陶磁が減少し始める14世紀前葉に古瀬戸製品の廃棄のピークが認められ、やはり生産年代との時期差は認めがたい。

（7）天目茶碗

古瀬戸の天目茶碗が褐釉の天目茶碗をモデルとしたことは明らかで、灰釉天目も一定量生産されることから青磁の天目茶碗も本歌の一つと考えられる。古瀬戸製品は中Ⅰ期から生産が開始され、中Ⅲ期にはいわゆる建盞写しが登場し、それ以降生産量に増加傾向が認められる。上記の4遺跡では古瀬戸・輸入陶磁とも量的には少ない。なお、褐釉の天目茶碗は13世紀中葉には出現するのに対し、古瀬戸製品の出現は当然のことながら13世紀末以降で、廃棄のピークは14世紀前葉以降である。

（8）その他

古瀬戸中期になると、広口壺・仏花瓶・香炉・水滴・天目台・燭台・茶入類など様々な器種が生産されるようになる。そのモデルとなる青磁酒会壺・褐釉壺・青磁香炉・褐釉茶入などの輸入陶磁の出現時期は、鎌倉では13世紀後葉以降と古瀬戸前期のモデルとなった器種と比べるとやや遅れ、13世紀末から14世紀初めに廃棄のピークを迎えるものが多い。一方、古瀬戸製品は、前記の碗・皿類や天目茶碗と同様、13世紀末から出現し始め14世紀前葉以降が廃棄のピークである。なお、古瀬戸の広口壺と断定できるものは極めて少なく、今小路西遺跡の北谷第1面から1点出土したのみである。

（9）入子・卸皿・柄付片口

最後に、古瀬戸製品のうち鎌倉においてかなり高い出土比率を示しながらも、輸入陶磁にその本歌を見出しがたい下記の3器種の生産状況と出土状況を確認しておきたい。入子は前期から中期にかけて生産が確認されるが、量産されたのは前Ⅲ期から中Ⅱ期である。紅皿として使用されたもので、特に今小路西遺跡では極めて高い出現率を示す。古瀬戸製品としては最も古い遺構面（13世紀中葉）から出現し、14世紀前葉が廃棄のピークで、生産年代との時期差は少ない。卸皿は前Ⅱ期に本格的に生産が開始され、それ以降後期にかけて生産が継続する。上記4遺跡では、前Ⅱ期から中Ⅲ期にかけて各時期のものがみられ、13世紀中葉から出現し14世紀前葉に廃棄のピークがある。柄付片口は、中期に出現する器種で後期にかけて生産される。他の中期の器種と同様、13世紀末以降に出現し14世紀前葉が廃棄のピークで、生産年代との時期差はみられない。

表3 鎌倉遺跡群における古瀬戸・輸入陶磁の器種別出土状況

千葉地遺跡

器 種 時 期	瀬戸															輸入陶磁										磁									
	古	瀬戸														輸入陶磁										磁									
	四耳壺類	瓶子類	水注類	洗	折縁鉢・盤類	碗・皿類	天目茶碗	仏花瓶	香炉・花盆類	合子	入子	卸皿	柄付片口	その他	合計	白磁四耳壺	青白磁梅瓶	高麗青磁梅瓶	白磁水注	青白磁水注	黄釉緑釉盤類	青磁折縁鉢類	白磁玉縁端反	白磁口禿	青磁同安柳描	青磁龍泉劃花	青磁龍泉蓮弁	天目茶碗	青磁酒会壺	青磁香炉	青白磁合子	褐釉壺・瓶類	その他	合計	
5面	+	0	0	0	0	0	0	0	0	0	+	+	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	3	1	1	1	1	0	0	0	0	1	10	
4面	5	0	0	3	0	0	0	0	0	0	+	+	0	0	8	0	3	2	0	1	1	3	1	16	10	8	10	0	0	0	6	2	13	76	
3面	10	4	5	2	15	5	1	3	0	3	+	+	0	1	49	1	7	6	1	2	5	28	0	25	0	1	27	0	1	3	6	3	37	153	
2面	4	2	2	3	22	11	3	14	10	4	+	+	11	1	87	2	5	2	1	0	4	8	1	6	1	1	6	1	0	0	4	2	27	71	
1面	1	6	1	0	5	3	1	0	1	3	+	+	2	0	23	0	1	1	0	1	1	4	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	14	26	
不明	1	0	0	0	2	0	0	1	0	1	23	21	0	0	49																				
合計	21	12	8	8	44	19	5	18	11	11	23	21	13	2	216	3	17	11	2	4	11	44	2	50	12	11	45	2	2	5	16	7	92	336	

※+は存在が予想されるもの。

千葉地東遺跡

時期	器種	瀬戸															輸入										陶磁										合計
		古	瀬	戸	合	計	白磁四耳壺	青白磁梅瓶	高麗青磁梅瓶	白磁水注	青白磁水注	黄釉緑釉盤類	青磁折縁鉢類	白磁玉縁端反	白磁口禿	青磁同安柳描	青磁龍泉劃花	青磁龍泉蓮弁	天目茶碗	青磁酒会壺	青磁香炉	青白磁合子	褐釉壺・瓶類	その他													
Ⅱ期		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	10	17	0	0	0	0	0	0	1	32			
Ⅲ期		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	2	0	1	0	11	19	0	0	0	0	0	1	4	41			
Ⅳ期		1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4	0	0	8	2	2	1	0	1	2	11	1	13	9	4	13	1	0	0	3	0	8	71			
Ⅴ期		5	0	0	0	1	0	0	0	0	9	4	0	1	20	1	3	0	0	1	2	13	1	13	3	7	23	1	0	0	9	1	19	97			
Ⅵ期		5	1	0	0	1	0	0	1	0	0	7	5	0	0	20	1	5	0	0	0	1	11	0	7	0	2	11	0	0	1	4	1	8	52		
Ⅶ期		5	7	1	3	42	5	5	9	7	2	22	14	11	4	137	0	11	0	5	2	6	14	1	16	5	9	23	3	2	0	4	4	18	123		
Ⅷ期		2	0	0	0	9	12	1	6	2	0	6	9	4	3	54	2	2	1	0	0	1	4	0	4	2	1	2	0	0	0	3	0	3	25		
合計		18	8	1	3	53	17	6	16	9	2	47	36	15	8	239	9	23	2	5	4	14	53	8	53	40	59	72	5	2	1	23	7	61	441		

今小路西遺跡

器 種 時 期	古	瀬戸													輪入陶磁													合 計							
		四耳壺類	瓶子類	水注類	洗	折縁鉢・盤類	碗・皿類	天目茶碗	仏花瓶	香炉・花盆類	合子	入子	卸皿	柄付片口	その他	合 計	白磁四耳壺	青白磁梅瓶	高麗青磁梅瓶	白磁水注	青白磁水注	黄釉緑釉盤類	青磁折縁鉢類	白磁玉縁端反	白磁口禿	青磁同安櫛描	青磁龍泉劃花		青磁龍泉連弁	天目茶碗	青磁酒会壺	青磁香炉	青白磁合子	褐釉壺・瓶類	その他
6面	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	7
5面	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	2	1	0	0	0	4	1	3	4	11	15	5	0	0	0	0	1	0	13	60
4・3面	14	14	1	2	3	0	0	2	0	1	67	13	3	1	121	6	22	1	4	10	7	18	1	94	7	4	19	3	8	3	23	5	183	418	
2面	22	21	0	3	23	4	3	5	2	1	97	53	7	2	243	4	11	1	0	2	1	17	1	49	0	3	47	5	0	0	12	4	92	249	
1B面	2	2	1	1	27	9	0	6	1	2	10	17	2	0	80																				
1面	11	19	2	5	21	8	5	6	4	0	49	54	3	4	191																				4
合計	49	57	4	11	74	21	8	19	7	4	224	137	15	7	637	16	44	3	5	12	13	51	7	189	22	26	107	9	9	4	49	11	333	910	

※1 B面は2面扱い、ただし大窯以降の製品は含めていない。

佐助ヶ谷遺跡

器 種 時 期	瀬戸														輪入										陶磁										合 計
	古 四耳壺類	瓶子類	水注類	洗	折縁鉢・盤類	碗・皿類	天目茶碗	仏花瓶	香炉・花盆類	合子	入子	卸皿	柄付片口	その他	合 計	白磁四耳壺	青白磁梅瓶	高麗青磁梅瓶	白磁水注	青白磁水注	黄釉緑釉盤類	青磁折縁鉢類	白磁玉縁端反	白磁口禿	青磁同安櫛描	青磁龍泉劃花	青磁龍泉連弁	天目茶碗	青磁酒会壺	青磁香炉	青白磁合子	褐釉壺・瓶類	その他		
8 期	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	7	0	1	0	0	0	0	0	3	3	1	1	8	0	0	0	1	1	12	31	
7 期	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	9	0	0	0	0	2	0	1	3	11	0	1	20	0	0	0	8	0	22	68	
6 期	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	11	0	0	0	1	0	1	2	3	7	0	0	28	0	0	0	6	0	23	71	
5 期	3	0	2	1	8	1	0	0	0	0	26	6	3	2	52	0	3	0	0	3	0	6	1	5	1	5	6	0	0	0	3	2	23	58	
4 期	6	3	0	0	1	0	0	0	0	0	4	2	0	0	16	1	1	0	0	1	0	4	0	2	0	1	7	0	0	0	1	1	9	28	
3 期	4	4	0	0	3	2	0	0	0	0	19	7	1	0	40	0	0	0	0	0	0	9	0	1	0	1	10	0	0	0	1	0	7	29	
2 期	7	5	0	0	37	23	0	4	1	0	2	13	4	7	103	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	1	7	
1 期	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	1	2	0	1	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	
合 計	32	12	3	1	52	27	0	4	1	0	66	30	8	10	246	1	7	0	1	6	1	23	10	29	2	11	80	0	0	0	20	4	99	294	

おわりに

鎌倉遺跡群における中世前期の古瀬戸と輸入陶磁の補完関係については、いくつかの特徴が指摘できる。全般的な傾向として出現時期は輸入陶磁の方が古く、廃棄のピーク時期も輸入陶磁は13世紀末から14世紀初めであるのに対し、古瀬戸製品のピークは14世紀前葉で、当該期に古瀬戸は輸入陶磁を量的に補完したことは既に述べた。

輸入陶磁と古瀬戸の主要器種の出土状況から、モデルとコピーの関係が想定できる器種についても同様の傾向が認められた。特に古瀬戸前Ⅲ期に登場し中期以降量産される折縁の鉢盤類や、中Ⅰ期に登場する碗皿類・天目茶碗・香炉などにその傾向が顕著で、これらの器種の生産開始時期は、そのモデルとなる輸入陶磁が大量に廃棄された時期とほぼ一致し、古瀬戸製品の生産量・廃棄量の増加は、14世紀前葉における輸入陶磁の流通量の減少と無関係ではないことが予想されよう。

また、古瀬戸前期に量産された四耳壺・瓶子・水注類や洗などについても、輸入陶磁の方が早く出現し廃棄のピークも早いという傾向が認められ、とりわけ瓶子類にその傾向は顕著であった。ただし、これらステイタスシンボル（威信財）としての調度具には、古瀬戸製品でも生産年代と廃棄年代に時期差がみられ、同じ古瀬戸前期の入子・卸皿・折縁の鉢盤類などと比べると、稀少で長期にわたって伝世する可能性が高いことが判明した。⁽²³⁾

それに対して、鎌倉で大量に出土する青磁・白磁の碗皿類など日常の供膳具については、古瀬戸前期にはほとんどコピーしていないこと、一方、入子・卸皿・柄付片口などの器種は、生産量が多く鎌倉でも出土比率が高いにも拘らず、輸入陶磁に本歌が確認できないことから、当該期の古瀬戸と輸入陶磁との間に機能に応じた補完関係（住み分け）が存在したことも明らかになった。

以上のことから、当該期の古瀬戸は輸入陶磁に存在しないもの、あるいは輸入陶磁の流通量の少ないものを重点的に生産しており、輸入陶磁とほとんど競合しなかった可能性が高く、中世前期の鎌倉遺跡群における古瀬戸と輸入陶磁の補完関係は、戦国期の城館における白磁や染付の皿と瀬戸・美濃大窯製品の皿にみられる価値的補完関係（競合関係）ではなく、コピーである古瀬戸製品自体が、モデルである輸入陶磁に匹敵する独自の価値観を有していたのである。特に、輸入陶磁の流通量が減少したと考えられる古瀬戸中期様式の成立期には、器種が豊富になるとともに鉄釉の使用が始まり、印花・画花・貼花など様々な技法を駆使した文様が施されるようになる。むしろ、それらは輸入陶磁の一定の影響下で確立するのであるが、あらゆる器種に鉄釉が使用され、量産化には直結しない印花文の種類多様性や、菊花文・巴文にみられるデザインの和風化には、輸入陶磁のコピーから脱却した古瀬戸の独創性をみることができる。当該期の古瀬戸が鎌倉でも最高級の階層にも受け入れられていたことは、嘉元4年（1306）に没する覚園寺開山心慧智海の蔵骨器に、古瀬戸の灰釉画花文広口壺が使用されたことから首肯されよう。

なお、本稿を草するにあたり檜崎彰一・齋木秀雄・服部実喜・馬淵和雄・田代郁夫・宗墓富貴子の各氏には多大なるご指導・ご教示をいただいた。末尾ではあるが記して謝意を表したい。

註

- (1)——矢部良明「宋元陶磁と古瀬戸の相関関係」『考古学ジャーナル 217』ニュー・サイエンス社 1983。 梶崎彰一「日本出土の宋元陶磁と日本陶磁」『東洋陶磁第 10・11 号』東洋陶磁学会 1984。 尾野善裕「モデルとコピーの視点からみた古瀬戸と中国陶磁」『貿易陶磁研究 12』日本貿易陶磁研究会 1992。 柴垣勇夫「日本の中世陶磁にみる国際交流」『東洋陶磁第 25 号』東洋陶磁学会 1996。 藤澤良祐「瀬戸の施釉陶器と中国陶磁」『陶磁器の文化史』国立歴史民俗博物館 1998 ほか。
- (2)——註(1) 梶崎論文。
- (3)——小野正敏『戦国城下町の考古学』講談社 1997。
- (4)——鎌倉における陶磁器の編年・組成等を扱ったものに服部実喜氏の一連の研究(服部実喜「中世鎌倉における陶磁器構成の時代的変遷」『貿易陶磁研究第 5 号』日本貿易陶磁研究会 1985, 同「南武蔵・相模における中世の食器様相(2)」『神奈川考古第 30 号』1994, 同「中世都市鎌倉と周辺地域出土の瀬戸窯製品」『研究紀要第 5 輯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1997) がある。
- (5)——本稿と同様、これらの 4 遺跡を取り上げたものに田代郁夫氏の論考(田代郁夫「中世都市鎌倉における遺跡の画期と出土中国陶磁」『青山考古第 12 号』青山考古学会 1995) があり、千葉地・今小路西・佐助ヶ谷遺跡の輸入陶磁のデータは、同論文に全面的に依拠している。なお、大倉幕府周辺、若宮大路周辺の武家地や浜地周辺の職人居住区といった時期・性格の異なる遺跡の検討は、今後の研究課題としておきたい。
- (6)——千葉地遺跡発掘調査団『千葉地遺跡』1983。
- (7)——神奈川県立埋蔵文化財センター『千葉地東遺跡』1986。
- (8)——本稿では調査担当者の一人である服部実喜氏のご教示を参考に、北東側河川 4 砂層下部の出土遺物を第Ⅱ期、同 4 砂層上部の出土遺物を第Ⅲ期、同 3 砂層と同 2 砂層の出土遺物を第Ⅶ期、同 1 砂層の出土遺物を第Ⅷ期に含めて資料化した。
- (9)——今小路西遺跡発掘調査団『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』1990。
- (10)——今小路西遺跡の古瀬戸製品を分析したものに宗基富貴子氏の論考(宗基富貴子「鎌倉・今小路西遺跡(御成小学校内)の瀬戸窯製品について」『研究紀要第 4

- 輯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1996) があり、器種毎の詳細なデータが提示されている。
- (11)——佐助ヶ谷遺跡発掘調査団『佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書』1993。
- (12)——佐助ヶ谷遺跡の古瀬戸製品のデータは、齋木秀雄氏をはじめとする調査団の方々のご尽力によるものである。未発表資料に公開に便宜を図っていただいた各位に対し感謝の意を表します。
- (13)——註(5) 田代論文。
- (14)——藤澤良祐「京・鎌倉における古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1995。
- (15)——また、第 1 面上の土坑から出土した「埋納瀬戸」3 点が、すべて中Ⅲ期までに収まることから、第 1 面上限は 14 世紀第 2 四半期まで遡る可能性が高いものと思われる。
- (16)——馬淵和雄「今小路西遺跡(御成小学校内)の再検討」『鎌倉第 77 号』鎌倉文化研究会 1995。 山本信夫「博多・大宰府の陶磁器から見た鎌倉」1996(根津美術館『甦る鎌倉—遺跡調査の成果と伝世の名品』に係わる研究集会資料)。
- (17)——平出紀男「白磁四耳壺について」『古代文化第 35 巻第 11 号』(財)古代学協会 1983。
- (18)——八重樫忠郎「平泉出土の輸入陶磁」『貿易陶磁研究 16』日本貿易陶磁研究会 1996。 なお、平泉遺跡群における白磁四耳壺以外の輸入陶磁の様相に関しても同論文による。
- (19)——東洋陶磁学会第 22 回大会の公開討論における梶崎彰一氏の発言(『東洋陶磁第 25 号』東洋陶磁学会 1996)。
- (20)——森達也「古瀬戸水注の研究—日野市南平出土資料の検討を通して—」『日野市ふるさと博物館紀要第 5 号』日野市教育委員会 1996。
- (21)——註(1) 梶崎論文。
- (22)——註(1) 梶崎論文。
- (23)——なお、古瀬戸中期の印花文瓶子なども、一乗谷朝倉氏遺跡や八王子城跡といった戦国期の城館から出土することがあり、これらについては伝世した可能性が高いものと思われる。

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター、国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員)
(1999 年 7 月 20 日受理, 2001 年 6 月 22 日審査終了)

Koseto Ware and Imported Ceramics in the Medieval City of Kamakura: Complementary Relations in the First Half of the Medieval Period

FUJISAWA Ryohsuke

It is widely known that Koseto ware, the only glazed ceramics produced in Medieval Japan, was a copy of the ceramics imported mainly from China of the Yuan and the Sung periods, and therefore it is considered that Koseto ware only played the complementary role to the imported ceramics. It is doubtful, however, whether this understanding is correct. The paper discusses such complementary relationship between Koseto ware and imported ceramics regarding a group of archaeological sites in Kamakura, which used to be the greatest site of consumption of the first half of the Middle Age.

Up to today, a number of excavations have been carried out in Kamakura. We have selected four sites out of them whose structural remains are in comparatively good condition and abundant in kind and volume, and made an analysis on the excavated amount (or the amount of disposal) of Koseto ware and that of imported ceramics. The result was that the disposal amount of imported ceramics reached its peak from the end of the thirteenth century to the early fourteenth century, while that of Koseto ware reached its peak a little behind in the first half of the fourteenth century, the time at the fall of the Kamakura Shogunate. In this context, it is presumable that the amount of distribution of imported ceramics declined in this specific period. On the other hand, with every kind of ware that bears such model-and-copy relations, it is identifiable that the disposal (appearance) of imported ceramics took place earlier as compared to the other. Further, with what are called status-symbols such as four handled-jar (*shijiko*), vase (*heisi*), and ewer (*suichu*), it is assumable that even Koseto ware had an heirloom period of nearly half a century between the date of production and that of disposal.

On the other hand, a large amount of bowls and plates of celadon and white porcelain excavated in Kamakura were hardly copied by Koseto of the Kamakura period, while for Koseto products, such as nest of bowls (*ireko*), grater (*oroshizara*), and spouted bowl (*katakuchi*), no original model can be identified with imported ceramics in spite of the high percentage they account for among the excavations. The fact shows that there was a kind of segregation between Koseto ware and imported ceramics.

In other words, for Koseto ware in the first half of the Medieval Age, the production was heavily inclined to those which did not exist among imported ceramics or whose amount of distribution was not large. Therefore it is possible to consider that there was no competition between them as was seen in the case of white or dyed porcelain and the small Seto-Mino plates in the Warring States period, and that Koseto ware, or the copy, had a unique value that could rival its model or imported ceramics.